

ISSN 2186 – 3989

古典日本語にみられる係助詞の共起  
－ その文構成上の機能を中心に －

坂田 一浩

Co-occurrence of “Kakari” particles seen in the classical Japanese  
－ Focusing on its syntactic functions －

Kazuhiro Sakata

北 陸 大 学 紀 要  
第51号(2021年9月)抜刷

# 古典日本語にみられる係助詞の共起 — その文構成上の機能を中心に —

坂田 一浩\*

Co-occurrence of “Kakari” particles seen in the classical Japanese  
— Focusing on its syntactic functions —

Kazuhiro Sakata\*

*Received June 21, 2021*

*Accepted July 27, 2021*

## Abstract

This paper aims to analyze sentences including co-occurrence of “Kakari” particles in the classical Japanese.

Treating them as sentence patterns having their own meanings structure, we divided them into two groups: chain forms (syntagmatic structure) and contrast forms (paradigmatic one). Results show that on both groups, sentences having each and every combinations of particles have its own syntactic structures, especially concerning chain forms, even in the same pair of particles, its different order results in different sentence structures.

Further, from the perspective of the cognitive process, these types of sentences can be divided into four categories. This suggests that patterns of co-occurrence of “Kakari” particles reflects the cognitive schema in the classical Japanese.

Additionally, results show that some of these types of sentences, for example, “zo – ha” chain forms and “koso ~ yaha” contrast forms, function as the sentence patterns to persuade the hearer.

Key Words : co-occurrence of “Kakari” particles, chain forms, contrast forms

## はじめに

よく知られているように、古典日本語と現代日本語を分かつ重要な特徴の一つとして、いわゆる「係り結び」およびそれを構成する係助詞の有無が挙げられる。すなわち、古典語（以下この略称を用いる）では「は・も・ぞ・なむ・や・か・こそ」の七つの係助詞によって文末との呼応関係、いわゆる係り結びが形成され、とりわけ「は・も」を除く他の助詞では係り先の文末が連体形、已然形といった特殊な形をとる。一方現代語はこのような係り結びの現象、および係助詞といわれる一群の語は実質的に消滅し、「は・も・こそ」が副助詞、あるいはとり

---

\*北陸大学経済経営学部（学外講師） Faculty of Economics and Management, Hokuriku University (Faculty Extramural)

たて助詞の名のもとに分類され、それ以外の係助詞は「知る人ぞ知る」のような慣用表現に化石的にその痕跡をとどめるのみである。

さて、このような係助詞およびそれによる係り結びの形成は、古典語を特徴づける重要なものであるが、従来のこれらに対する考察は、用例文中の或る一つの係助詞を取り上げて考察を行うといった方法が主流であった。しかし係助詞は決して一文中に一つだけ現れるわけではなく、複数のものが共起している場合も多いのである。例えば以下の例のように。

み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり (新古今和歌集 1)

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋はかなしき (古今和歌集 215)

荻の葉にすがく糸をもささがには七夕にとや今朝はひくらん (詞花和歌集 82)

父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。(伊勢物語 11 段)

門のことをこそきこえつれ、障子あけたまへとやはきこえつる。(枕草子 5 段)

このような場合、そこに現れた係助詞のうちの一つのみを取り上げて考察することが、果たして常に妥当かつ有効な方法であるといえるかどうか？ 共起係助詞の一方が他方の意味発動に何らかの影響を与える、あるいは、共起係助詞が作用しあって一つの文型を形成するといった可能性は、検討されてしかるべきではないだろうか。このような係助詞の共起現象に関しては、夙に本居宣長が『詞の玉緒』で言及して以来、尾上圭介(1995)や小田勝(2004)などにおいても取り上げられているが、いずれも部分的な考察にとどまっているのである。

本稿では以上のような問題意識にもとづきつつ、係助詞共起による構文が古典語において事態把握の型を表明する形式として機能していたのではないかとの見通しのもとに、考察・検証を進めてゆく<sup>1</sup>。

## 係助詞共起構文の分類

さて一口に係助詞の共起といっても、共起係助詞の出現個数や組み合わせ、また、各々の共起係助詞の文中での位置づけや、相互の関係性といった点についてみていくと、さまざまなケースがあり、それらを区別せずに扱うことは、当該の係助詞共起構文の本質そのものを見失うことにもなりかねない。

結論から先に言えば、文構成の観点から、本研究では次のものを係助詞共起構文とする。

一文中に複数の係助詞を含み、(ただし「もぞ」のような複合形は一つの係助詞とみなす)、かつその係助詞に関して、1) 単文において各々が承けている成分が同一の述語用言にかかっているといった構造をもつもの、または、2) 重文において当該助詞の承ける成分が、前件、後件の核となる用言にそれぞれ係っており、相互に意味上、対比・照応の関係にあると見なされるもの

ここで上記 1) のようなものを「連鎖式」、2) のようなものを「照応式」と名付けることとする。以下に、それぞれの例を挙げておく。

①ちはやぶる神垣山のさか木葉は時雨に色もかはらざりけり (後撰 457)

②ひとりぬる時はまたる鳥の音もまれにあふ夜はわびしかりけり (古今 895)

③殿司こそ、なほをかきものはあれ。(枕草子 44 段)

(以上、連鎖式の例)

④年ごとに逢ふとはすれどたなばたのぬる夜の数ぞすくなかりける (古今 179)

⑤秋たちていくかもあらねどこの寝ぬる朝けの風は袂すずしも (拾遺 141)

⑥むかしより人には思ひおとし給へれど、みづからの心ざしの又なきならひに、ただ御事のみなむあはれにおぼえける。（源氏・濤標 99）

（以上、照応式の例）

ここで 1) の連鎖式についてさらに詳しくみてゆくに、まず出現係助詞の数に着目すると、二つが共起している二項式、三つ共起の三項式、というように分類できる。なお以下の考察ではおもに二項式を取り上げることとする。また共起係助詞の組み合わせ、および出現順序により、上掲例の①をハモ連鎖構文、②をモハ連鎖構文、③をコソ・ハ連鎖構文と名付けることとする。

一方 2) の照応式についてみるに、上掲例のように二項の対比が多数を占めるが、まれに三項以上の例もある。ここで照応式の場合も連鎖式と同じく共起係助詞の組み合わせ、および出現順序により、上掲例の④をハ・ゾ照応構文、⑤をモ・ハ照応構文⑥をハ・ナム照応構文と呼ぶこととする<sup>2</sup>。

なお連鎖式、照応式を通じて、共起係助詞が二項の場合、少なくとも一方の項は概ね「は」または「も」であり、例えば「A ぞ B なむ」のような、「は」「も」以外の係助詞相互の組み合わせは極めてまれである<sup>3</sup>。

以上みてきたように係助詞共起の構文においては、同じ共起係助詞の組み合わせであっても、その出現順序が異なる場合は別形式として扱うが、そもそもなぜ出現順序を問題とするのか。結論から先に言えば連鎖式において、係助詞の出現順序の違いはそもそも文構造の違いを意味するからである。

以下、代表的な二つの連鎖形式の組み合わせを取り上げ、この点について確認したい。

## 係助詞共起連鎖構文の諸相—「は」と「も」「ぞ」による連鎖形式を中心に

本節では係助詞共起構文のうち、連鎖式について考察を進めるが、係助詞共起構文の中でも、「は」と「も」、「は」と「ぞ」の組み合わせは最も多くみられるものである。ここでは双方の組み合わせを取り上げ、さらに助詞の出現順序の違いが各々の構文の意味構造にどう関わるかを検討することにより、連鎖式の構文的特徴を明らかにしたいと思う。

考察を進める前にまず、現代語の「は」「も」の意味用法につき整理しておく。そもそも「は」には

題目提示： クジラは哺乳類だ。

対比： クジラは哺乳類だが、サメは魚類だ。

の二つの用法があり、一方「も」は

単純他者肯定： 彼が行くのなら私も行こう。

意外： さすがの彼もこの数式は理解できないようだ。

やわらげ： 秋も深まってまいりました。

の三つの用法があるとされる<sup>4</sup>。

それでは次に、ハモ連鎖構文の和歌・散文双方における用例を挙げてみる。

⑦故郷は(者)遠くも(毛)あらず一重山こゆるがからにおもひぞ吾がせし（万葉 1038）

⑧あだ人のたむけに折れる桜花あふ坂までは散らずもあらん（後撰 1305）

⑨糸によるものならなくに別れ路は心ぼそくも思ほゆるかな（拾遺 330）

⑩かく恋ひむものとは我も思ひにき心の占ぞまさしかりける（古今 700）

⑪時はいとあはれなるほどなり。人はまだ見馴るといふべきほどにもあらず。

（蜻蛉日記・上巻）

ここで各々の用例における「は」「も」の意味用法についてみると、「は」は概ね題目提示として機能している。一方「も」は⑩のような単純他者肯定もみられるが、⑦から⑨のように文末の打消・願望・詠嘆などの陳述表現と呼応してそれを強調する、陳述強調とでも呼ぶべき用法が多くを占めている。これは先に挙げた「も」の三用法とは異なるもので、古典語には比較的多くみられるものである<sup>5</sup>。

これに対してモハ連鎖構文ではどうか。まず例を挙げる。

⑫うちつけにさびしくもあるか紅葉ばも主なき宿は色なかりけり (古今 847)

⑬雪ふかき岩のかけみちあとたゆる吉野の里も春はきにけり (千載 3)

⑭天気のこと、楫取の心にまかせつ。男も慣らはぬは、いとも心ぼそし。まして女は、船底に頭を突き当てて、音をのみぞなく。(土佐日記)

⑮いみじう美美しうてをかしき君達も、隋身なきは、いとしらじらし。(枕草子・第 72 段)

⑯はかなき花紅葉と言ふも、をりふしの色あひつきなくはかばかしからぬは露のはえなく消えぬるわざなり。(源氏・帚木 50)

ここでハモ連鎖構文と同様に出現係助詞の意味用法についてみると、「も」は意外、「は」は対比・限定である場合が多いことが分かる。そうして文全体として、例えば⑫では、本来鮮やかに色づくはずの「紅葉ば」が、その家の主人の死去によって「主なき」宿では、それに反して「色なかり」、というのであり、また⑮では本来「美美しうてをかしき」君達が、「隋身なき」場合となるとそれに反して「いとしらじらし」ものとなる、という風に、ある物事事態が、ある状況下におかれた場合に限って、本来とは異なる様相を呈する、という意味構造となる。

以上をまとめると、ハモ連鎖構文では「題目提示のは+陳述強調のも」の組み合わせが多く、一方モハ連鎖構文においては「意外のも+対比のは」の組み合わせが多い。そうして全体の意味構造は、ハモ連鎖構文では「は」が提示した題目について、「も」取り立て成分がその属性などをさらに絞り込んで述部の叙述につなげており、一方モハ連鎖構文では「A も B は C」の文型において、「も」が取り立てた事象 A につき、「は」が状況 B を限定することで、その場合に限って当該事態 C が成立する、ということ述べているといえる。このように、「は」「も」の共起による連鎖構文では、両助詞の出現順序の違いにより、文全体の意味構造が大きく異なる傾向を有するのである<sup>6</sup>。

次には「は」と「ぞ」の組み合わせによる連鎖構文について検討する。ここでも両助詞の出現順序の違いを勘案しつつ、ハヅ・ヅハそれぞれの連鎖構文の例を挙げる。

⑰世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすきものにぞありける (古今 795)

⑱五月雨のつづける年のながめにはものおもひあへる我ぞわびしき (後撰 190)

⑲紫の花のなかには、かきつばたぞ、少しにくき。(枕草子 83 段)

⑳大江殿といひけるところは、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。(源氏・須磨 22)

(以上、ハヅ連鎖構文)

㉑遊びをに我はありけり宿貸さず帰しし吾ぞ(曾)みやびをにはは(者)ある (万葉 127)

㉒奥山にもみち踏み分け鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき (古今 215・百人一首)

㉓若菜ぞ今日をば知らせたる。(土佐日記)

㉔わが思ふにはいますこしうちまさりて嘆くらんと思ふに、いまぞ胸はあきたる。

(蜻蛉日記 44)

㉕そののち奈良のみやこ聖武天皇の御ときぞ、橘諸兄の大臣と申人勅をうけたまはりて萬葉集をば撰ぜられける。そのころまではうたのよきあしきなど、しひてえらぶことなどはいともなかりけるにや。(古来風体抄 311)

(以上、ヅハ連鎖構文)

まずハゾ連鎖構文の意味構造についてみるに、ここでの「は」は上掲の例からも分かる通り  
題目提示の用法であり、そこで提示された題目について「ぞ」取り立て句を含む説述部が説明  
を行う、という構造になっている。このように題述構文である点においてさきにみたハモ連鎖  
構文と同様の構造であり、実際、両構文はその構文機能の面で極めて近いふるまいを見せている<sup>7</sup>。

ではもう一方のゾハ連鎖構文はどうであろうか。佐治圭三（1991）は、ここに挙げたような  
「AぞBは」の共起形式について、「AはBぞ」の単純な倒置形式であるとするが、はたして  
そうであろうか。結論から先にいえば、ハゾとゾハの両連鎖構文は、単に後者が前者の倒置形  
式であるとみるべきではない。そもそも、「は」「ぞ」が承ける成分の倒序によって、そこで  
表明される事態認知のあり方が大きく変容を来しているのである。そのことはゾハ連鎖構文に  
みられる「は」の意味用法を検討した上で、当該構文全体の表現構造を確認することによって  
明確になる。

そもそもゾハ連鎖構文における「は」は、㉔の例を見ても分かるように、題目を提示するも  
のとしては機能していない。題目提示であれば一文は構造上、テーマを提示する提題部と、そ  
れについて述べる説述部に二分され、「は」は提題部末尾に位置してその直後は意味上、音調  
上の切れ目が感得される。ところが㉔はいかにしてもそのような構造ではない。大きく切れる  
のはむしろ「声聞く時ぞ」、すなわち「ぞ」の直後であり、「は」は切れ目どころか却って、  
「秋は悲しき」の中にあって緊密にまとまろうとする部分に位置する。他方、この例における  
「は」は対比でもない。「秋は」と対比・対照されるべきいかなる他事象も想定され得ないか  
らである（この捉え方は尾上圭介 1995 にその多くを負う）。したがって㉔以下の例に見ら  
れる「は」はいずれも、題目提示とも対比ともみられないものであり、このような「は」につ  
いて尾上（1995）は、「これらの例（引用者注「はるかクナシリに白夜は明ける」「雨が降る  
降る城ヶ島の磯に」の歌詞をさす）は、『白夜が明けることよ』『雨がふることよ』とほぼ言  
い換え得ることからも見えるとおり、『白夜が明ける』『雨がふる』という事態を一体的な事  
態として詠嘆の対象にしているのであり、（中略）題目提示でも対比でもないこの種の「ハ」  
の表現性は、『白夜が明ける。ああそうなんだなあ』とも言うべき詠嘆であって、比喩的に言  
うなら、一つの情景の全体を一枚の絵画として額縁に入れて少し離れたところから眺めやると  
いう趣の詠嘆とでも言えるであろう。」と述べた上で「額縁の詠嘆の『は』」と名付け、さら  
に「古代語のこの種の『は』は、『～ゾ～ハ～ケル』という文型的条件の下に現れることが多  
いようである」とも述べている<sup>8</sup>。

このように、ゾハ連鎖構文における「は」の機能がハゾ連鎖構文のそれと異なるものである  
以上、前者を後者の単なる倒置とみなすことはできない。そもそも両構文は、今みてきたよう  
に「は」の用法の相違からくる文の構造自体の相違を示すとともに、「は」「ぞ」両助詞の出現  
順序の違いによって、次に述べるように文全体の表現性の違いをも示しているからである。

そもそもハゾ連鎖構文は、「は」がその取り立て成分を一文の題目として提示し、かつ  
「ぞ」が題目に対する説述部中のある成分を、一文の焦点として取り立てる、という表現構  
造をもつ。これに対してゾハ連鎖構文は、「ぞ」がその取り立て部を一文のメインの焦点と  
してまず提示し、続いて「は」が、「ぞ」取り立て部に関する説述部分中のある成分を副次的  
焦点として取り立てる、という構造になっている。今、このようなゾハ連鎖構文の表現過程を  
舞台上に例えれば、メインの俳優に強い光がまず注がれ、つづいてその横にいる脇役にやや弱い  
光が向けられる、というあり方にも似ているであろう。さらに同様の喩えをハゾ連鎖構文につ  
いて用いれば、こちらはまず舞台上のある一角へ、比較的広い範囲にわたってやや弱い光が当  
てられ、次にその射程内にある特定の人物・事物に焦点を絞った、強い光が向けられつつ、そ  
れを周囲から際立たせる、というスポットライトの効果に准えることができよう。

以上みてきたように、ハゾ・ゾハ両連鎖構文は後者が前者の単なる倒置形式ではなく、  
そこにみられる「は」の意味用法の相違が端的に示しているように、それぞれ異なる文構造、

さらに言えば異なる事態認識プロセスを表している<sup>9</sup>。また、同様のことはハモ・モハ両連鎖構文においても見いだされたところであり、係助詞共起の連鎖構文においては、助詞の組み合わせと並んでその出現順序も、意味構造の規定に密接にかかわることが確認されたのである。

## 種々の係助詞照応構文とその機能的連関

本節では照応式の係助詞共起構文についてみていくが、本稿でいう照応式とは、簡単に言えば重文の前件と後件に係助詞によるとりたて句が配され、相互が対比対照の関係にあるものである。現代語では「兄は医師で、弟は薬剤師だ」「暇はあるがお金がない」のように、「は～は」「は～が」がこのような対比の構文としてよく知られているが、古典語では係助詞の種類豊富さに対応して、より多彩な形式があった。

まず現代語にも見られる「A は～、B は～」の形をとるハ・ハ照応構文は、「は」によるとりたて項を単純に対置させ、対比させるものであり、その意味では照応構文の中でも最もプリミティブなものであるといえる。

②6里はあれて人はふりにし宿なれば庭もまがきも秋の野らなる (古今 248)

②7もみぢちる音はしぐれの心ちしてこずゑのそらはくもらざりけり (後拾遺 383)

②8ふるさとのみかさの山はとほけれど声はむかしのうとからぬかな (後撰 1106)

②9津の国までは舟にて、それよりあなたは馬にて急ぎ行き着きぬ。 (源氏・湊標 103)

ただ、純粋な対置、あるいは前後項が全く対等に対比されている(すなわちどちらも対等に表現上の焦点となっている) ケースは少なく、(②6と②9の例はその数少ない典型)、②7②8のように多かれ少なかれ伝達上の焦点として軽重の差が窺える(多くは後件が焦点)ものが大半である。

そうしてさらに進んで前後件の間に接続助詞等の働きにより従属節・主節の関係が成り立ち、両者に軽重の差が明確に意識されると、

③0年をへて消えぬ思ひはありながら夜の袂はなほこほりけり (古今 596)

③1ひとつ家のうちは照らしけめど、ももしきのかしこき御光にはならばずなりにけり。

(源氏・絵合 176)

③2婿になどはおぼしよらで、女にて見ばやと色めきたる御心には思はず。

(源氏・紅葉賀 245)

これらの例のように後件、ひいてはそこに含まれる後項の「は」とりたて句が伝達上の焦点として際立ってくるが、こうなると次に取り上げるハ・ゾ、ハ・コソ照応構文に近いものとなってくる。さらに、次の例は前件が譲歩節に近い関係で後件へと続くもので、こちらは後述のコソ・ハ照応構文に近いあり方である。

③3いと深きよしにはあらねど、いまめかしうかどありとは言はれたまひし更衣なりけり、げにめやすきほどの用意なめり、と見給ふ。 (源氏・柏木 37)

さて、照応構文において後件取り立て句を表現上の焦点として明示する形式に、ハ・ゾ照応構文がある。後件に伝達の焦点があり、かつ前・後件の間には対比、逆接、譲歩など様々な対立関係が確認される。この点で次に述べるハ・コソ構文との通有性がみてとれるものである。

③4百千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく (古今 28)

③5岩間よりながるる水ははやけれどうつれる月の影ぞのどけき (後拾遺 845)

③6女郎花みるに心はなぐさまでいとど昔の秋ぞこひしき (新古今 782)

③7この言葉、なにとにはなけれども、ものいふやうにぞきこえたる。 (土佐日記 18)

③8御調度などは、そこらしおかせ給へれば、人々の装束、なにくれのはかなきことをぞいそぎ給ふ。 (源氏・竹河 269)

③④では「ものごとに改まる春」と「古りゆく我」が「は」「ぞ」によって対照させられているが、一首の眼目は当然後件の「我」にある。③⑥も同様の構造で、和歌の場合、ハ・ゾ照応構文はこのように対語構成をなしつつ、その後項を一首の眼目として強調するという構文的機能を果たしているものが多数を占める。他方、散文の例である③⑧では、「は」とりたて句を含む前件事態は「興入れの道具類は既に準備済みなので」として背景に退き、後件の、目下調製中である「人々の装束、なにくれのはかなきこと」が「ぞ」によって、前景の事態として提示されるといふ、和歌の例と同様の表現構造になっている。

次にハ・ゾ照応構文と同じく後項の取り立て句が表現上の焦点となるものに、ハ・コソ照応構文があるが、「は」「こそ」の組み合わせの照応構文には今一つ、これとは逆の出現順序をとるコソ・ハ照応構文がある。両構文は一文における伝達の焦点のあり方、係助詞とりわけ「こそ」の機能、さらに文全体の意味構造の三点において相違をみせている。以下、それぞれの例を挙げる。

- ③⑨ 滝の音はたえてひさしくなりぬれど名こそながれてなほきこえけれ (拾遺 449)
- ④⑩ つられけれど恨むるかぎりありければものはいはれで音こそなかるれ (同 974)
- ④⑪ わするる身をしるあめはふらねども袖ばかりこそかわかざりけれ (後拾遺 704)
- ④⑫ 似てははべれど、これはゆゆしげにこそはべるめれ。(枕草子 6段)
- ④⑬ この中将とは思ひよらず、なほ忘れがたくすなる修理の大夫にこそあらめとおぼすに、(源氏・紅葉賀 262)

(以上、ハ・コソ照応構文)

- ④⑭ あまのかるもにすむむしのわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ (古今 807)
- ④⑮ かたちこそみやまがくれのくちなれ心は花になさばなりなむ (同 875)
- ④⑯ かきくらしなほふるさとの雪の中にあとこそみえね春はきにけり (新古今 4)
- ④⑰ すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじうなつかしき方にはおぼしたりしものを、など思ひ出できこえ給ふにつけても、(源氏・花散里 397)
- ④⑱ なにがしら、田舎びたりといふ名こそ侍れ、くちをしき民には侍らず。宮この人とてもなにはばかりかあらむ。(源氏・玉鬘 340)

(以上、コソ・ハ照応構文)

まずハ・コソ照応構文では、表現の焦点は「こそ」とりたて句を含む後件にある。例えば③⑨では、「(滝の)名こそが世に流れ、すなわち流布して今になお聞こえるのだ」、また④⑪では下句の「袖だけが乾かないのだ」、こちらが表現上の焦点であり、「こそ」はこの焦点を特に取り立てるものとして機能している<sup>10</sup>。その一方で前件の「は」取り立て句は、③⑨では「滝そのものの流れる音は絶えて久しくなったが」また④⑪では「忘れられてゆく我が身を知る雨は降らないけれども」と、後件の焦点句を際立たせ、対照によって印象付けるための前提句となっているのである。これに対してコソ・ハ照応構文では、伝達の焦点はやはり後件にあるが、こちらは「は」が焦点取り立ての機能を担っており、これに対して「こそ」は前件に位置して譲歩の前提句を形成している<sup>11</sup>。また両構文についてそれぞれ「は」「こそ」が含まれる前件・後件の関係を見るに、ハ・コソ照応構文では③⑨から④⑱のいずれの例も、前後件が対立的な関係にある点は共通しながらも、③⑨のように前件が譲歩の前提句とみられる例、さらに④⑰のような対比、あるいは④⑱のような単純な逆接など、対立のあり方はさまざまな様相を呈している。他方コソ・ハ照応構文では前件の「こそ」の機能により、ほぼ全ての例で譲歩の構文が形成されており、そこでは前後件の間で伝達内容の重要度の点で軽重の差を設けつつ、表現主体の主張の焦点は後件にある、といった構造になっている<sup>12</sup>。このことは例えば④⑱の例では「外見は泣いているが、心の中では恨みはしない」とし、また④⑮では「かたち」と「心」が対比させられているように、外見と内実を対照させ、後者を「は」が取り立てつつ、表現上の比重を置いている例が散見されることから、はっきりと確認される。

以上「は」と、「は」「ぞ」ないし「こそ」の対置による照応構文についてみてきたが、これらに関連するものとして古典語では今一つ、「こそ」と「やは」の対置による照応構文が多く見出される。

④春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる（古今 40）

⑤あぢきなく雲みの月にさそはれてかげこそいづれ心やはゆく（和泉式部日記）

⑥あふことのあけぬ夜ながらあけぬれば我こそかへれ心やはゆく（新古今 1168）

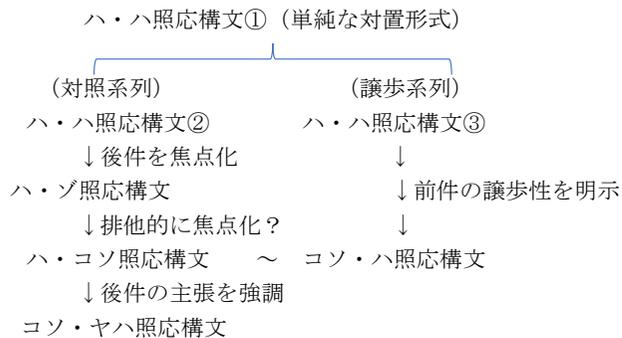
⑦門のことをこそきこえつれ、障子あけたまへとやはきこえつる。（枕草子 5 段）

④の例では、「梅の花は（暗闇で）色こそ見えないが、その香りは隠れることがあるのか。いや、香りは隠れない」の意で、⑤は「雲がかかった月に誘われて私の影こそ外へ出ていくが、心はよそへ行くだろうか、いや行きはせずにとどまっている」の意である。これは前件に「こそ」を含んでおり、かつ主張の焦点が後件にある点、さらに後件と齟齬するような前件の事態を一応は肯定しつつも、それを副次的な事態として後件での主張内容に重きを置く点で、先ほどみたコソ・ハ照応構文と同じく譲歩の形式である。ただ、後件に反語の「やは」が置かれることにより、コソ・ハ照応構文の場合の「は」に比べてより強くその言明の妥当性を聞き手に強調するものとなっている。この点でコソ・ヤハ照応構文は、コソ・ハ照応構文の強示形であると考えられ、「こそ」「やは」両助詞の互いに映発し、照り返し合う作用により、さらに強い提示として機能しているのであった。

以上みてきた各構文の、表現機能上の関係は次のようである。まず、単なる対置形式のハ・ハ構文(①)から、その前後項の間に表現意図上、軽重の差が認められると、後件が焦点化された対照(②)、もしくは譲歩(③)のハ・ハ構文となる。そうして前者はさらに後件を明確に焦点化することでハ・ヅ、ハ・コソの各構文へとつながり、一方後者は前後件の譲歩関係をより際立った形で対立させる、コソ・ハ、コソ・ヤハ照応の各構文へとつながる、このような関係性が浮かび上がるのである。

以上の考察から明らかになったことを簡単に図示すると次のようになる。

図 1) 主な係助詞共起照応構文の相関図



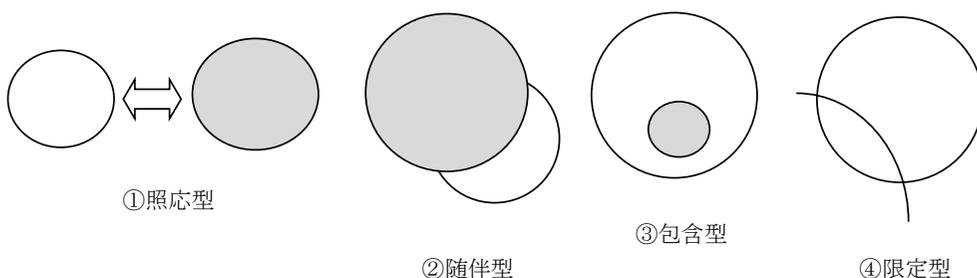
## 係助詞共起構文を通して表明される、事態認識の四つの型

前節まで、係助詞共起構文の中でも出現頻度の高い、代表的な類型についてそのいくつかをみてきた。ここでもう一度、そもそも係助詞共起構文とは何か、またそれは古典日本語において、どのような事態認識のあり方を表明するものとして存在、機能しているのかという根本的な問題意識に立ち返って検討を加えてみると、次のようなことが見えてくる。

そもそも古典語にみられる、複数の係助詞が現れている文においては、互いの係助詞は無関係に存在しているのではなく、ある場合には対照関係にあつて互いに映発し合い（コソ・ヤハ照応構文）、またある場合には各々の係助詞において特定の意味用法が表れやすくなる、すなわち一種の意味発動規制がみられるなど（モハ連鎖構文）、相互に何らかの関係性が認められること、これまで見てきた通りである。そして言語の線条性、すなわち時間の流れに沿ってある言語表現が表出され、理解されるという過程で、これら共起係助詞の関係性はまた、表現主体、ないし理解主体の認知プロセスをも反映しているであろう。

そこで今、これまで考察してきた各種の共起構文を、表現主体の事態把握のあり方、事態認知のプロセスがどのように反映されているか、という点から総括的にとらえ直してみると（話を単純化するためにここでは二項形式を取り上げる）、次の四つの類型が見いだされる。まず各種照応構文（①）では共起係助詞が承ける二つの項を、双方に目をやりつつ対照・比較するという認知プロセスが見て取れる。一方、連鎖構文のうちゾハ構文（②）は、まず表現上の主焦点となる「ぞ」取り立て成分に目が注がれ、次に副次的焦点となる「は」取り立て成分に目が向けられること、前々節において舞台での照明効果に喩えて説明したところである。また、同じ連鎖構文でもハモ、およびハゾ構文（③）では、まず「は」によって一文中の題目となる事象が提示され、さらに「も」あるいは「ぞ」が「は」取り立て事象の属性、あるいはそれに所属するものなど、「は」取り立て事象が内包しているとみられる概念を取り立てることによって、「は」から「も」「ぞ」へと、表現上の焦点が次第に絞り込まれていく過程が見て取れる。さらにモハ連鎖構文（④）になると、さきに見て来たように「も」取り立て事象についての述部での説述が、「は」がとりたてる状況においてのみ命題として成立すること、つまり「も」取り立て事象についての命題が、「は」取り立て句による状況の限定を俟ってはじめて成立するものである、という表現構造になっている。今、それぞれの認知プロセスのあり方から見て、①を照応型、②を随伴型、③を包含型、そして④を限定型と名付けた上で、各々を模式的に示すと次のようになる。

図 2) 係助詞共起構文にみられる認知プロセス模式図



図中の円は、係助詞が承ける語（あるいは語句）の概念内容を表し、かつそれが表現主体によって一文の中で焦点化されていることを示している。比喩的に言えば、ある人物事物に焦点を当てるために舞台に注がれた、スポットライトの円周だと考えてもよいであろう。ここで①から③において、一方の円がグレーの塗りつぶしとなっているのは、それがメインの焦点であることを示し、したがってもう一方の白ヌキの円は副次的焦点となる。これを事例に即して説明すると、①では「滝の音はたえてひさしくなりぬれど名こそながれてなほきこえけれ」の歌を例にすれば、「滝の音」が左の概念円に、また「名」が右の円に相当し、②では「奥山にもみち踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋はかなしき」の場合、「声聞く時」が左上の塗りつぶしの円に、「秋」がその下の白ヌキ円に相当する。そうして③の場合はハゾ連鎖構文「君しのぶくさにやつるふるさとは松虫のねぞかなしかりける」を例にすると、「君しのぶくさにやつるふるさと」が大円の方に相当し、「松虫のね」が大円に包含された塗りつぶしの小円にあたる。最後に④の限定型はモハ連鎖構文に典型的にみられるものであるが、「うちつけにさびしくもあるか紅葉ばも主なき宿は色なかりけり」の歌を例にとると、「紅葉ば」が大円に相当し、図中、大円の一部を切り取る形の弧が「主なき宿(は)」による状況の限定作用を示している。

ところで、今は説明の便宜のために各類型に属する共起構文のほんの一例しか挙げていないが、①は前節に挙げた各照応構文がこれに該当する。他方、②の随伴型に属するものとしてはほかにも

世に知らでは、何のかひかはあらむ。この人のかくねむごろに思ひきこえ給へるこそ、いまは御幸ひなれ。 (源氏・玉鬘 337)

雪降りて年の暮れぬる時にこそつひにもみちぬ松も見えけれ (古今 340)

さても誰か、かくにくきわざはしつらむ。 (枕草子 177 段)

のようなコソ・ハ、コソ・モ、カ・ハなどの各連鎖構文がある。要するに「第二類：ぞ・なむ・や・か・こそ＋第一類：は・も」の組み合わせ、かつ出現順のものは概ねこの随伴型に属すると言える<sup>13</sup>。

また③の包含型は、既に挙げたハモ、ハゾ両連鎖構文以外にも、

かの親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし。 (源氏・玉鬘 363)

春霞たちわかれゆく山道は花こそ幣とちりまがひけれ (拾遺 74)

夏と秋とゆきかふ空のかよひちはかたへすずしき風やふくらむ (古今 168)

のように、ハ・ナム、ハ・コソ、ハヤなどの連鎖構文に見いだされるが、②とは逆に「第一類：は・も＋第二類：ぞ・なむ・や・か・こそ」の組み合わせ、出現順であるものが多数を占める。最後に限定型は、モハ連鎖構文を典型とするが他にも、

春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり (古今 17)

わがやどの花見がてらにくる人はちりなむのちぞこひしかるべき (同 67)

よそながらやまんともせずあふことは今こそ雲のたえまなるらめ (後撰 535)

のように「は・も＋は・ぞ・なむ・こそ」の組み合わせおよび出現順序で、第二項に時間・空間などの状況限定成分が来る場合に顕著に現れる。

このように、係助詞が一文の中で共起し、相互に関連性を有することで、事態認知の枠組みが形成される。ここで提示した共起係助詞による事態認知表明の四類型は、映画におけるカメラワークになぞらえることができよう。すなわち、照応式のあり方は二つの事象に相互にカメラを振る、あるいはクロスカッティング (cross-cutting) の技法に、また随伴式はメインの対象からちらっと脇にカメラを向ける働き (一種の panning) に、さらに包含式はクローズアップ (close-up) に、そして限定式は画面のフレーミング (framing) に、各々当てはめてみることができる。

以上みてきたように、係助詞共起を含む文の考察にあたっては一連の文の流れにおいて、一方の係助詞によるとりたてから他方によるとりたてへと、双方を有機的に関連付けつつ、一つ

の認知プロセスとして理解する必要があるのではないだろうか。このことは、共起係助詞をそれぞれ個別に考察していたのでは決して見えてこない視点であり、これこそが共起現象を対象として研究する意義であると考えられるものである。古典日本語において、係助詞共起構文によって或る事態を述べるということは、このような認知の枠組みに当てはめて当該事態を把握するというに他ならないのである<sup>14</sup>。

## まとめにかえて—係助詞共起構文という視点から見えてくるもの

以上、係助詞共起構文の種々のありようについて、实例をもとに考察を試みた。ここではまとめにかえて、係助詞共起構文という視点が、古典日本語の研究においてどのような意義をもつか、またどのような研究の可能性が開けてくるのかという点につき、簡単に展望を述べてみたい。ひとまず、次の三つの点を挙げておく。

まず前節において述べたように、係助詞の共起現象は単に、複数の係助詞が偶発的に一文中に現れているのではなく、古典語において確固とした表現の型を形成しており、それは何よりも前節において図解したように、事態認識の枠組みをも端的に示すものであった。今後はさらに用例を精査しつつ、本稿で示した四つの型をベースに（もともと、これ自体にも修正の余地は十分あるが）、今回は考察対象から除外した係助詞共起の三項、四項形式に対しても同様の検討を行うことで、より複雑な共起構文における事態認知表明のあり方が解明されるものと考えられる。

次に、和歌に関して係助詞共起の型を指標に用例を集めていくと、表現形式上の類歌がおのずと集まってくる。例えば、「～は～も～こそ」という係助詞連鎖三項の共起例を集めていると、狩衣袖の涙にやどる夜は月も旅寝の心ちこそすれ（千載 509）

春の夜は軒端の梅をもる月のひかりもかをる心ちこそすれ（新古今 24）

このようにきわめてよく似た発想をもつ二首を見つけることができる。同様に、「～は～も～ぞ」「～は～や～は」の型を指標にそれぞれ用例を収集すると、

わが宿にさきみちにけり櫻花ほかには春もあらじとぞ思ふ（拾遺 126）

さみだれはみづのみまきのまこも草かりほすひまもあらじとぞ思ふ（同 206）

とこなつににほへる庭ははからくにおれるにしきもしかじとぞみる（同 225）

いつしかとあけゆく空のかすめるはあまのとよりや春はたつらん（金葉 3）

つららみし細谷川のとけゆくは水上よりや春はたつらん（金葉 4）

さくら花でごとくにをりて帰るをば春のゆくとや人はみるらん（詞花 29）

あまの河かへらぬ水をたなばたはうらやましとや今朝はみるらん（同 91）

このような発想上の類歌がおのずと集まってくる。このことは、当時の作歌の上で係助詞共起の文型が、たとえ無意識であるにせよ一つの型として認識され、それに基づいて歌が詠まれていたことを示唆するものではないだろうか。

他方、散文においても係助詞共起の型を指標として用例を集めることにより、類似構文が集積されてくる。今、源氏物語からその一例を挙げると、まずコソ・ハ連鎖構文では、

なほこれこそはかの人々の捨てがたく取り出でしまめ人には頼まれぬべけれ、とおぼすものから、（簞木 61）

ほふしなどをこそはかかる方の頼もしきものにはおぼすべけれど、さこそ強がり給ほど、若き御心にて、言ふかひなくなりぬるを見たまふに、やる方なくて、（夕顔 124）

さいへど、年うちねび、世の中のとある事としほじみぬる人こそものをりふしにはたのもしかりけれ、いづれもいづれも若きどちにて、いはむ方もなけれど、（夕顔 127）  
このように簾木と夕顔の巻において、「某ノ人物『こそ(は)』某ノモノトシテ／或ル場合ニ『は』頼モシイ」という共通の意味構造を持った複数の叙述があぶり出されるのであり、また、「も～ぞ」の照応構文の例の中には、

また頼もしき人もものし給はねば、ただこの大将の君をぞよろづに頼みきこえ給へるに、  
（賢木 359）

又頼もしき人もことにおはせざりけり。古き齋宮の宮司など、仕うまつり馴れたるぞ、わづかに事ども定めける。（澤標 121）

こなたより、やがて北に通りて、明石の御方を見やりたまへば、はかばかしき家司だつ人なども見えず、馴れたる下仕ひどもぞ、草の中にまじりてありく。（野分 46）

このように「他ニ頼モシイ人物『も』ナク、某バカリ『ぞ』頼モシク、事ヲ取り仕切ッテイル」という共通した事態が等しくモ・ゾ照応構文の型によって描写されている、という例が複数見いだされるのである。しかもこのように離れた巻々相互の間で、このような類似が見られることは、源氏物語の成立・執筆事情解明にあたってはも何らかの示唆を与えるものではないだろうか。

最後に、学校教育において古典文法を教授し、あるいは古典講読を行うにあたっては、係助詞共起現象の考究によって得られた成果は有用なものとなり得るであろう。いわゆる係り結びの規則と係助詞の用法は、古典文法の初歩の段階で必ず教授されるものであるが、係助詞のうち、「ぞ・なむ・こそ」については多くの学習教材が一括して、いずれの意味も強調であるとしている。しかしこれらの助詞によって何がどう「強調」されるのか、またこれら三つの助詞の「強調」には、それぞれどのような質的差異があるのか、明確な説明がなされているものは管見の限り、皆無に等しいという状況である。この問題に関しては、実は研究者の間でも諸説紛々としており、現行の学習教材類にみられるこのような状況は、ある意味その反映ともみられるものであるが、そもそも或るテキストや文における「強調」あるいは「とりたて」とは、他の非強調あるいは非とりたて部の存在を俟ってはじめて意味をもつ、相対的な作用である。すなわち、ある係助詞による強調、とりたての作用について検討する場合は、当該係助詞が置かれた言語上の環境の中で考える必要があり、その際、このような環境の構成要素の一つとして、他の共起係助詞は重要な要素の一つとなるはずであるが、従来の研究ではこのような視点が欠落していたと言わざるを得ないのである。

このように、係助詞共起を含む文を独自の意味構造をもつ確固とした文型として捉え、そこに見られる共起係助詞相互の関係を検討し、さらに共起構文のテキスト内での機能について考察を加えることは、古典語の文法研究において、新たな研究領域を開拓する可能性を含んだものであると言えよう。

付記)

引用資料の本文は、例⑤の古来風体抄のみ日本歌学大系本に拠ったが、それ以外は全て岩波の新大系本の本文から引用した。ただ、表記は若干改めた箇所がある。なお源氏物語の引用で、巻名の後ろに付した洋数字は新大系本における頁数を示す。

## 注

<sup>1</sup> ここで一つ指摘しておきたいのは係助詞共起という現象が、古典日本語においては決して特殊なものではないということである。例えば古今和歌集では、全歌 1100 首のうち、29.3%にあたる 323 首に係助詞の共起がみられ、散文においても、例えば源氏物語では桐壺巻に限って調査した結果では全 198 文中（句読の切り方は新大系本に従う）22.7%に相当する 45 の文において係助詞の共起が認められる。また実際の用例も、和歌、物語、日記紀行、説話、歌論書など、あらゆる作品・文章のジャンルに及んでいる。なおタイトルでは古典語としているが、本稿では平安時代の資料を中心として考察を進めることとする。

<sup>2</sup> 係助詞共起構文としてはこの他にも、

あさぼらけたゆく水はあさけれどふかくぞ花の色はみえける（後撰 130）

のように連鎖構文中の係助詞と、他の係助詞が照応の関係にあるもの、また、

御心こそ鬼よりけにもおはすれ、さまはにくげもなければ、えうとみはつまじ、と、

（源氏・夕霧 144）

のように複数の連鎖構文が互に対比・照応の関係にあるものもある。いわば連鎖にして照応、の例であるが、このようなケースも今後の研究課題となる。

<sup>3</sup> これに関しては小田勝（2004）による調査があるが、それによれば源氏物語では全係り結び文の 1%未満と、かなり特殊なケースに属する。また連鎖構文の構成においては、「は」「も」では

この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす。（竹取物語）

かかる所も、もとよりつくるひかかはる人もなければ、いとあしくのみなりゆく。

（蜻蛉日記・上巻）

のように自身の重用による「A は B は」「A も B も」といった形式は古典語においては多くみられるが、それ以外の「ぞ・なむ・や・か・こそ」ではこういった重用は極めて稀である。このような共起におけるふるまいの違いに鑑みて、本稿では「は」「も」を第一類係助詞、それ以外の「ぞ・なむ・や・か・こそ」を第二類係助詞と呼ぶことにする。また、上掲の小田の調査は、ここでいう第二類の係助詞同士で連鎖構文を形成することが稀であることを示している。

<sup>4</sup> ここに挙げた「も」の分類は沼田喜子（1986）に従う。後に刊行された沼田喜子（1995）では若干の名称の変更が見られるが分類の枠組み自体は変わらない。他書での引用も前者に拠るものが多いので、今はこの名称に従う。

<sup>5</sup> 現代語では「少しもうれしくない」のような打消表現との呼応にその名残をとどめる。

<sup>6</sup> このようなモハ連鎖構文の表現機構についての詳細は、坂田一浩（2003b）を参照のこと。

<sup>7</sup> この点については坂田一浩（2004）を参照のこと。

<sup>8</sup> このような表現性の「は」は次々節で述べるように、連鎖式の係助詞共起文の、第二項以下に表れる場合に多く見られ、現代語では訳しにくいものであるが、その表現性は、現代語では例えば、「象は鼻が長い」の倒序形式、「鼻がね、象は長いんだよ」の「は」に近いであろう。

<sup>9</sup> なお、ゾハ連鎖構文はどのような文章や場面で使用されるか、という点で特徴的な傾向をもつ。一つは、本文中に挙げた例⑤のような歌学書や、

右

嬉しくも罪は夜の間に消えぬなり暮行く年や身に積るらむ（592）

(前略) 右ノ歌、「罪の消ゆることは嬉しきを」などいひてぞ下句の心は叶ふべき。「嬉しくも」と置きては、年の身に積もるも嬉しきやうに聞こゆらん。(以下略) (六百番歌合 592 歌に対する判詞)

ここに挙げたような歌合の判詞といった、いわば理非を「ことわる」文、すなわち議論文において書き手の見解・主張を述べる場合に多くみられる。他方で物語文、特に源氏物語では会話に現れることは極めて稀で、

少しけ近ういまめきたるけをつけばやとぞ、乱れたる心には心もとなく思ひたる。

(末摘花 215)

かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。(玉鬘 333)

近衛府の使は頭の中将なりけり。かの大殿にて、出で立つ所よりぞ人々はまゐりたまうける。(藤裏葉 188)

のように、地の文にあって事の背景、顛末を叙述するくだりに多くみられる。

10 ここで問題になるのは、ハ・ゾ、ハ・コソ両照応構文の間にとどのような違いがみられるのかという点であるが、そこでは当然、「ぞ」「こそ」によるとりたての違いが深く関わってくる。これについては、古くは富士谷成章の『あゆひ抄』や、それを踏まえた佐伯哲夫(1971)など、多くの先行研究において論じられているが、近年のものとしては吉田茂晃(2009)の「ゾが当該事態の成立にもつばら意識を向けるのに対して、コソは他事態の不成立を確認することで当該事態の成立を際立たせるような含意をもっている」という捉え方が、比較的穏当な説であろう。ただ共起構文として捉える場合は当然、「は」の存在がどのように影響してくるかという点を加味して検討する必要があるが、これについては他稿を期したい。

11 「こそ」によるこのような前提句の構成のあり方については、史的変遷も含めて大野晋(1993)に考察がある。

12 ここでそもそも「譲歩」とはいかなる表現機構かという点について、改めて確認しておく必要を感じる。そもそも文法用語としての譲歩 (concession) とは、元来英文法から持ち込まれた概念であり、「ある事柄を述べる際に、それと相反するまたは結び付かない付随的な事柄を、容認すべきこととして加えることがあるが、そうした付随的陳述を導く接続詞をいう」(『新英語学辞典』) というのが一般的な理解であろう。古典語においてこのような譲歩句は「とも」のような接続助詞と並んで、「こそ～已然形」による逆接前提句によっても形成された。

そもそも古典語における譲歩構文は、本文中の④から⑥の例をみてもわかるように、

1) 前件と後件は同一事象の①相反する面 (④から⑥の例) か、②マイナス面⇄プラス面 (⑦⑧の例) を述べる、という関係にあることが多い。

2) 表現主体は前件の事態の成立を一応肯定しながらも、その主張の焦点はあくまで後件にある。

3) 前件は一見、後件の事態を認めることに不都合な事態に見えるが、両者に軽重の差を認めることで、前件事態は後件における言明の妥当性にさしたる影響がないとする(極端事例であるから、表面上のことである等、さして重要な事態でないから、あるいはさほど関連がないから)

4) 最後に、あえて自己の主張に不都合な前件を付加することで、全体としての命題に客観性と説得力を持たせる

という特質が指摘できる。

さて、上記 3)4)の点からみても、古典語において譲歩構文とは一種の説得・主張の形式であ

った。とりわけコソ・ハ照応構文に関しては、その中で譲歩句中の「こそ」表現主体の主張に対する反証、いわば都合の悪い点を取り立てる一方で、後件は対比・限定の「は」の取り立てによって、自分の主張でここだけは譲れないという点を明示し、主張の妥当性を強調するものとして機能している。事実、古今集では、「こそ」による譲歩の前提句をもつ構文 22 例のうち、実に 7 例においてその後件に「は」が出現しており、古典語譲歩構文における係助詞「は」出現の必然性を裏付けるものといえよう。さらに和歌においてコソ・ハ照応構文は、④⑤の例が典型的に示すように対語を構成する一つの表現形式として、レトリカルに用いられてもいた。

<sup>13</sup> 第一類、第二類の呼称に関しては、注 3 を参照のこと。

<sup>14</sup> もちろんこの四つの類型で、係助詞共起構文の全ての用例が截然と分類できると考えるほど筆者も楽天主家ではないし、ことはそれほど単純でもない。

また、例えばハモ連鎖構文のすべてが③の包含型に属するのではなく、

山里は世のうきよりもすみわびぬことのほかなる峰の嵐に（新古今 1623）

のような比較構文では照応型、また

たつ幣のわが思ひをば玉ほこの道のへごとの神もしるらむ（貫之集 750）

では②の随伴型、というように、共起係助詞自体の形式に加えて、そこでの共起係助詞が承ける語句相互の意味的関連にも大きく左右される。本稿で提示した四つの類型はあくまで元型である。実際の用例においては係助詞共起の枠組みと、それらが取り立てる成分相互の意味的関連と、どちらが優先するか、それによって文全体としてのあり方が決まるのである。元型としての包含式なのであり、上のような例はそれが使用されるうちに元型が援用、使用範囲が拡張されて生じた派生的な例であると捉えることができる。しかしそれは、元型としての本質的特性を否定するものではない。

ともあれ、二つの被とりたて事象間の関係をどう把握するか、その基本的なありかたをこの四つの類型はある程度反映しているものと思われ、さらにそれが、古典語においては係助詞共起の型によってある程度明確に示されるものであることを、我々はここで注意してよいと思うのである。

## 参考文献

- 大野晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店  
小田勝（2004）『『異なる係結が重出する文』からみた係り結びの表現価値』  
『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編』43  
尾上圭介（1995）『「は」の意味分化の論理』『言語』（大修館書店）24 卷 11 号  
尾上圭介（2002）「係助詞の二種」『国語と国文学』79 卷 8 号  
北原保雄（1981）『日本語の世界 6 日本語の文法』中央公論社  
佐伯哲夫（1971）「こそ」『月刊文法』（明治書院）3-5  
坂田一浩（2003a）「『多係助詞構文』という視点—三代集における『も』と他の係助詞との共起』『熊本大学社会文化科学研究』1  
坂田一浩（2003b）「『もみぢ葉もぬしなき宿はなかりけり』—古典語における『は』『も』の共起に関して」『国語国文学研究』（熊本大学）38  
坂田一浩（2004）「ハモ構文の表現機構—古典語における「は」「も」の共起に関して（その二）」『国語国文学研究』（熊本大学）39  
佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』ひつじ書房  
沼田善子（1986）「とりたて詞」（奥津敬一郎編『いわゆる日本語助詞の研究』所収）  
沼田善子（1995）「現代日本語の『も』」（つくば言語文化フォーラム編『「も」の言語学』所収）  
吉田茂晃（2009）「係助詞の分類と文末活用形との呼応関係」『山邊道：国文学研究誌』52